雨宿りの出会い　大和物語　百七十三[1]

良峰の宗貞の少将[2]、ものへゆく道に、五条わたりにて、雨いたう降りければ、荒れたる門に立ちかくれて見入るれば、五間ばかりなる檜皮屋の下に土の屋倉などあれど、ことに人なども見えず。歩み入りて見れば、階の間に梅いとをかしう咲きたり。鶯も鳴く。人ありとも見えぬ御簾の内より、薄色の衣、濃き衣の上に着て、丈立ちいとよき程なる人の、髪、丈ばかりならんと見ゆるなり、

蓬おひて荒れたる宿を鶯の人来となくや誰とか待たむ[3]

と、ひとりごつ。

少将、

来たれども言ひしなれねば鶯の君に告げよと教へてぞ鳴く

と、声をかしくて言へば、女、驚きて、「人もなしと思ひつるに、ものしきさまを見えぬること」と思ひて、ものも言はずなりぬ。男、縁にのぼりて居ぬ。「などか、物のたまはぬ。雨のわりなく侍れば、やまむまでは、かくて」など言へば「大路よりは漏りまさりてなん、ここは中々[4]」と答へけり。時は正月十日のほどなりけり。御簾の内より、しとねさし出でたり。引き寄せて居ぬ。簾もへりは蝙蝠に食はれて、所々なし。内のしつらひ見入るれば、昔おぼえて、畳など良かりけれど、口惜しくなりにけり。日もやうやう暮れぬれば、やをらすべり入りて、この人を奥にも入れず。女悔しと思へど、制すべきやうもなくて、いふかひなし。

雨は夜一夜降り明かして、またの日つとめてぞ少し空晴れたる。男は女の入らんとするを、「ただかくて」とて、入れず。

日も高うなれば、この女の親、少将にあるじすべき方のなかりければ、小舎人童ばかりとどめたりけるに、堅い塩、肴にて酒を飲ませて、少将

1 傍線は読解に役立つ重要語だから辞書で調べること。数字は単なる注釈ではなく読解で意識するポイント。

2 良少将とも呼ばれ、六歌仙の僧正遍照である。苔の衣の話（大和物語第百六十八段）では出家して世間を逃れた生活中に小野小町に歌で言いよった。

3 この歌が後の少将の行動を決めることになる。貧しい生活で、ウグイスが誰かが来ることを期待させるが、あてにできる誰が来るだろうかいや来る人などいない。ウグイスのウグが憂くの掛詞。

4 遠慮なのか、お断りなのか、平安時代の和歌のやりとりのような掛け合いかも。

には、広き庭に生ひたる菜を摘みて、蒸し物といふ物にして、茶碗に盛りて、箸には梅の花の盛りなるを折りて、その花びらに、いとをかしげなる女の手にて、かく書けり。

君がため衣の裾を濡らしつつ春の野に出でて摘める若菜ぞ[5]

男、これを見るに、いとあはれに思えて引き寄せて食ふ。女わりなく恥かしと思ひて臥したり。

少将起きて、小舎人童を走らせて、すなはち車にて、まめなる物さまざまに持て来たり。「迎へに人のあれば、今またも参り来む」とて、出でぬ。それより後、絶えずみづからも来とぶらひけり。「よろづのもの食へども、なほ五条にてありし物は、めづらしく、めでたかりき」と思ひ出でける。

年月を経て、仕うまつりし君に、少将おくれ奉りて「変はらん世を見じ」と思ひて、法師になりにけり。もとの人のもとに、袈裟洗ひにやるとて、

霜雪のふる屋の中にひとり寝のうつぶし染めのあさのけさなり[6]

となんありける。

5 誰の歌か。また、この家の「親」の様子からみて、どのような生活をしていて、歌の作者は少将についてどう思っているのか。

6 うつぶし染（喪服用）とうつ伏せの他に、掛詞が少なくとも三つは使われています。また、縁語も使われています。